

■  
絵画作品



《一輪の薔薇》  
20×30センチ 紙にインク

## 一輪の薔薇

紀井利臣

古代エジプトのクレオパトラが薔薇を愛したことはよく知られていますが、古代ギリシャの神話では女神アフロディテが海から誕生する時、最初に咲いた花が白い薔薇で、純潔や神の愛をあらわしたと言われていています。中世においてはキリストと天の女王である聖母マリアのエンブレムであり精神的愛を表すとされ、薔薇は純理的な美、道徳的調和、形而上的光輝といった概念にふさわしい象徴だったのです。そして、歴史の中で薔薇は数多くの伝説や象徴を生み、花の女王と呼ばれるように歴史の上にはなくてはならない花となります。形の美しさもさることながらその美しい芳香が数多くの物語を生んできました。

今日われわれが親しんでいる大輪のハイブリッド・ティーローズの最初の人工品種は1867年に生まれた「ラ・フランス」です。その後品種改良が続けられ、現在でも毎年新しい品種が生まれ、いまでは2万種以上のバラがあるとされています。しかし、その原種は5種類ほどで、驚くことにその2種類が日本原産なのです。

わが国では770年頃に成立した「万葉集」に「イバラ」が記されていますが、これはノバラの一種で、奈良時代から薔薇が日本人の間に知られていたことがわかります。900年頃には中国から日本にもたらされたバラの栽培が貴族を中心として観賞用とした植物となっていくます。現在、日本はバラの品種改良の主要な国で、日本人の名前が冠されたバラが増え続けています。

絵画として重要な要素に「生命力」があります。リアリズムの本質です。人は絵を眺めそこに何かを感じ取ろうとしますが、自分と共有するものを最初に見出すものです。それにより感動が生まれてきます。それはノスタルジアであったり、希望であったりしますが、それは描いた側と見る側、お互いに共振する何かがあるのです。

薔薇に何を求めるのか、それはお互いに生命力かもしれません。今回、命あるものを表したいとの願いを、自分で育てた薔薇を描くことで表現してみたのです。